

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第34集

HONJOURU
本城原遺跡

主要地方道城野尻線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第34集

HONJOURU
本城原遺跡

主要地方道都城野尻線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

序

日頃より埋蔵文化財の保護、活用につきましては深いご理解とご協力を頂き、厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、平成11年度に宮崎県小林土木事務所より依頼を受け、主要地方道都城野尻線道路改良工事に伴う本城原遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

調査の結果、溝状遺構や掘立柱建物跡などの遺構を検出しました。また、それらの遺構に伴う、中国の明末から清の初頭にかけての陶磁器類も出土いたしました。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯教育の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導ご助言をいただいた諸先生方、ならびに地元の皆様に対し心より厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

例　　言

1. 本書は、宮崎県小林土木事務所が計画した主要地方道都城野尻線道路改良工事に伴う事前調査として宮崎県教育委員会が実施した本城原遺跡の発掘調査報告書である。調査は、県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
2. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図『野尻』をもとに作成した。
3. 現地における実測図等の作成および写真撮影は主として福田泰典、松永幸寿が行い、南正覚雅士、柳田宏一、下田代清海、松本茂、橋川敬子の協力を得た。
4. 谷口武範（県文化課）、東憲章（同）の両氏には、発掘全般にわたって指導助言ならびに調査への協力を得た。
5. 地形測量、地中レーダー探査、空中写真撮影はそれぞれ業者に委託した。
6. 遺物・図面の整理は宮崎県埋蔵文化財センターでおこなった。また、遺物の実測・拓本・計測などについては、福田、松永のほか整理作業員の協力を得て実施した。
7. 本書で使用した写真は、現場の写真を福田と松永が、遺物の写真については福田が撮影した。
8. 本書に使用した方位は座標北である。一部、磁北を用いた図面には、「M.N.」と明記した。レベルは、海拔絶対高である。
9. 土器の色調および土層の注記については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
10. 陶磁器類については、九州陶磁文化館の鈴田由紀夫氏から多くのご教示を頂いた。
11. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。
 竪穴建物跡 … S A 挖立柱建物跡 … S B 溝状遺構 … S E 土壙 … S C
12. 本書の執筆と編集は福田がおこなった。
13. 本城原遺跡に関する遺物・実測図などは宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第Ⅱ章 調査の概要	5
第1節 調査の経過	5
第2節 基本層序	6
第Ⅲ章 調査の記録	8
第1節 A区の調査	8
1 遺構	
2 遺物	
第2節 B区の調査	10
1 遺構	
2 その他の遺物	
第3節 C区の調査	25
1 遺構	
第Ⅳ章 まとめ	28

挿図目次

第 1 図 本城原遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第 2 図 本城原遺跡周辺地形図	4
第 3 図 基本層序模式図	6
第 4 図 グリッド配置図	7
第 5 図 A区遺構分布図	8
第 6 図 2号溝状遺構土層断面図	9
第 7 図 2号溝状遺構出土遺物実測図	9
第 8 図 3号溝状遺構出土遺物実測図	10
第 9 図 B区遺構分布図	11
第10図 溝状遺構実測図ならびに土層断面図 (SE3、SE4、SE5)	13
第11図 掘立柱建物跡実測図 (1)	16
第12図 掘立柱建物跡実測図 (2)	17
第13図 掘立柱建物跡実測図 (3)	18

第14図	掘立柱建物跡出土遺物実測図(1)	19
第15図	掘立柱建物跡出土遺物実測図(2)	20
第16図	1号竪穴建物跡実測図	21
第17図	1号竪穴建物跡出土遺物実測図	22
第18図	1号土壤実測図	22
第19図	B区出土遺物実測図(1)	23
第20図	B区出土遺物実測図(2)	24
第21図	B区出土遺物実測図(3)	24
第22図	C区遺構平面図	25
第23図	6号溝状遺構土層断面図	26
第24図	6号溝状遺構出土遺物実測図	27
第25図	野尻城(本城)縄張り図ならびに周辺地形図	29

表 目 次

第1表	掘立柱建物跡一覧表	15
第2表	出土遺物観察表	27

図 版 目 次

図版1	A区全景
	B区全景
	C区全景
	B区溝状遺構(垂直)
	2号溝状遺構土層断面
	3号溝状遺構土層断面
	1号竪穴建物跡
	1号土壤
図版2	2号、3号溝状遺構出土遺物
	B区掘立柱建物跡出土遺物
	B区出土遺物(1)外面
	B区出土遺物(2)内面
	B区出土石製品
	C区6号溝状遺構出土遺物

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本城原遺跡は、宮崎県西諸県郡野尻町大字東麓字本城原に位置する。

この地は、野尻城、紙屋城など永禄期に伊東氏の48城として数えられた中世の代表的な城郭遺構が数多く残るとともに、伊東・島津の両雄が南九州の霸権めぐって争った真幸口をおさえる要衝の地でもあった。今回の工事で計画された路線沿いにも「本城原」の小字が示すとおり、中世城郭の遺構が良好な状態で残存していることが確認されていた。

そこで、工事に先立って小林土木事務所より県文化課に埋蔵文化財の有無の照会があり、現地での踏査及び試掘調査を行った。その結果、路線予定地内の崩落した法面に空堀と思われるV字溝が確認されるとともに、地表面観察から中世城郭の遺構が現状で確認され、道路改築工事により遺跡に影響が及ぶことが確実であった。そこで、文化課と小林土木事務所による協議を行い、現状保存が困難な部分について記録保存のため発掘調査を行うことになった。

調査は、小林土木事務所の依頼により、宮崎県教育委員会が主体となり平成11年8月23日から平成11年12月24日までの間実施した。

第2節 調査の組織

本城原遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長	笠山 竹義
教育次長	川崎 浩康
教育次長	岩切 正憲
文化課長	仲田 俊彦
同課長補佐	矢野 剛
主幹兼庶務係長	井上 文弘
埋蔵文化財係長	北郷 泰道
同主任主事	東 憲章

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	田中 守
副所長	江口 京子
庶務係長	児玉 和昭
調査第二係長	青山 尚友
主査(調査担当)	福田 泰典
調査員(嘱託)	松永 幸寿

調査協力 野尻町教育委員会 宮崎県小林土木事務所

調査指導 鈴田由紀夫(九州陶磁文化館)

第3節 遺跡の位置と環境

野尻町は宮崎県西諸県郡のはば中央部に位置する。北西から北東部にかけては、四十万層群を基盤とする九州山地南端の標高300~500mの丘陵が連なっている。中央部には、始良カルデラに起源をもつた入戸火碎流堆積物が厚く堆積し、標高約200m前後の台地を形成している。いわゆる南九州特有のシラス台地であり、流水の侵食作用によって形成された急崖と平坦な谷底によって構成された特徴的な景観を見せていている。さらに町の南部では、隣接する高城町・高崎町・高原町との境界となる岩瀬川・大淀川に向かって低地が広がっており、北高南低の地勢を呈する。

今回調査の対象となった本城原遺跡は町の中心部から南に約1km、岩瀬川支流の城ノ下川左岸の台地縁辺部、標高約163mに位置する。付近では雨水等による台地の浸食によってできたと思われる細い谷筋が数多く確認される。地質的にもこの遺跡一帯はシラスが卓越する地域で、城ノ下川による深い浸食谷は遺跡と川の間に約60mほどの比高差を生み出している。

野尻町内では、詳細分布調査等により200箇所余りにのぼる遺跡が確認されている。

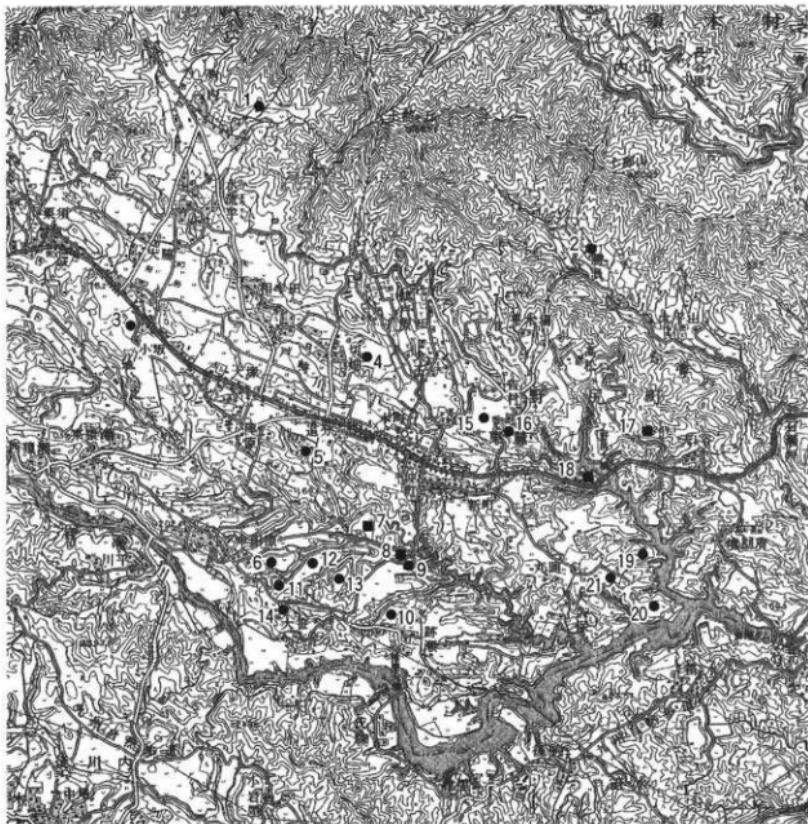
大字三ヶ野山に所在する大荻地下式横穴墓群は、5世紀後半~6世紀前半に造られた大規模な群集墓である。蛇行剣や武具のほか、馬具・装身具など多量の副葬品が出土しており、この地域の古墳時代の様相を解明していく上での重要な位置を占めている。また、「延喜式」兵部省諸国駅伝馬条に見える日向国16駅の一つ「野後駅」もこの地に比定されており、古代より交通の要衝であったことを伺うことができる。

次に本城原遺跡の周辺に目を向けてみると、中須第1~4遺跡・東麓上野原第3遺跡・大笠遺跡・野首遺跡など繩文時代から古墳時代の遺跡が集散している。これらの遺跡は、城ノ下川とその南側を流れる岩瀬川に挟まれた間に、南東から北西方向の軸をもって分布する特異な様相を呈している。同じことは、北部丘陵の麓に沿ってはやり軸的な広がりを見せる遺跡の分布状況にもついても指摘することができ、古代の道筋との関連を視野に入れた検討が必要である。

また、中世の遺跡としては、城ノ下川を挟んで対峙する台地に野尻城跡がある（以下「新城」）。地元では「新城」と呼び、本城原遺跡の北側に残存する城郭遺構と区別している。この地方は、戦国期には伊東氏の支配下にあったが、肥後に通じる道筋にあたること、島津氏の支配下にあった真幸をおさえる要でもあったため政争が絶えなかった。伊東氏の主要な城郭の一つであり、永禄期に同氏が日向国内におけるその版図を拡大した際の拠点ともなった野尻城であったが、天正5年（1577）に当地の地頭福永丹波守が島津氏に内通するに及び形勢は逆転し、この地は島津氏の領するところとなつた。

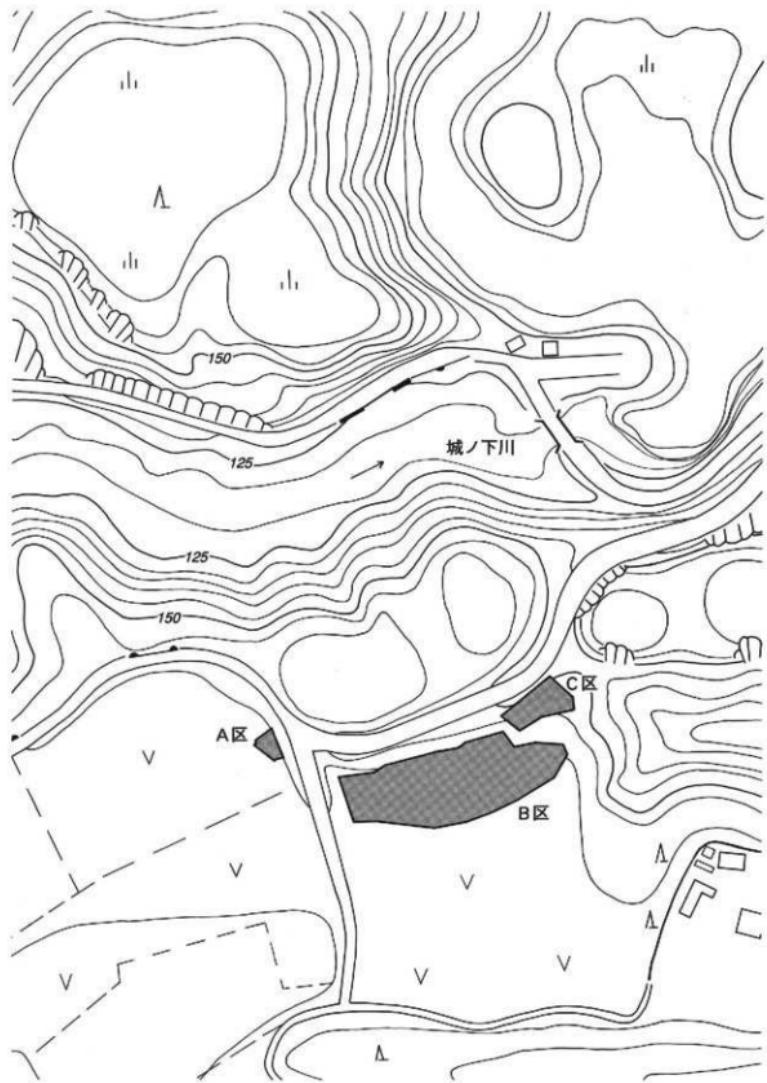
近世以降、当地は島津氏の領国支配の体制下に置かれ、「野尻郷」として鹿児島藩直轄領に組み込まれることにより外城としての性格をもつようになる。その後、幾度かの分離・再編を繰り返しながら郷としての機能を維持し幕末まで「野尻郷」は存続した。

(参考文献)	『宮崎県史』	通史編	原始・古代1	(1997)	宮崎県史刊行会
	『宮崎県史』	通史編	古代2	(1998)	同 上
	『宮崎県史』	通史編	中世	(1998)	同 上



1. 大迫遺跡 2. 勝負遺跡 3. 出手水第2遺跡 4. 星ヶ平遺跡 5. 九ツ塚遺跡
 6. 野首遺跡 7. 野尻城跡(新城) 8. 野尻城跡(本城) 9. 本城原遺跡 10. 東麓上野原第3遺跡
 11. 中須第1遺跡 12. 中須第2遺跡 13. 中須第3遺跡 14. 中須第4遺跡 15. 奥畠遺跡
 16. 堂ヶ迫遺跡 17. 高松城跡 18. 戸崎城跡 19. 東麓丸岡第1遺跡 20. 東麓丸岡第2遺跡
 21. 東麓丸岡第3遺跡

第1図 本城原遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 / 50,000)



第2図 本城原遺跡周辺地形図 (1 / 2,000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過

遺跡は標高約163mの台地縁辺部を中心に東西方向に広がっていたが、近年の道路新設やシラス台地という脆弱な地質的要因によって崩落が進み、旧地形が部分的にすでに失われている所もあった。そこで本調査では、県文化課による事前の試掘調査の結果に基づきA～C区の3調査区を設定し、比較的面積が狭いA区から着手、続いてC区、B区の順で調査を始めた（第2図）。調査に際しては、表土除去作業後に10mグリッドを設定し、3つの区を一括する形でアルファベットと整数で杭の名称を表示した。

8月31日、現地調査を開始。遺跡の全体像を確認するために、主要地方道都城野尻線（県道42号）で隔てられた北側丘陵に残る本城の縄張り図を作成する。残存状況が良好で城郭遺構を明瞭に確認できた。

9月2日、A区の調査に着手。トレントで観察するとシラス混じりの耕作土がかなり厚く堆積しており、近年の地形改変による景観であることが判明した。耕作土を除去後に、二次堆積アカホヤ層の前位層上面で溝状遺構1条とピットを検出したが、遺物は出土しなかった。また、A区とB区を隔てる町道の西斜面の崩落により調査以前から存在を指摘されていたV字溝については、安全面への配慮から調査内容を埋土状況と溝の形状を確認する程度に留めた。

9月28日、A区の調査終了後、調査区としては最も東側に位置するC区の調査に着手した。この調査区は崩落や重機による伐開等で遺構の残存状況が危惧されたが、崩落したシラスの中から地山整形による土壠やそれを一部断ち切る箱薬研の通路を検出した。遺物も陶磁器類が数点出土した。

10月15日、最後のB区の調査に着手。重機で耕作土を除去すると表層から20cm前後の比較的浅いレベルでアカホヤ層が面的な広がりを見せ、複数のピットが検出されたことから、アカホヤ層の上面で遺構の検出を行うことにした。その結果、掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡1基、溝状遺構3条、土壠1基が検出されたほか、遺物もC区と同じ時期の中国産の貿易陶磁、土師皿、砥石などが溝や柱穴等から出土した。また、平坦に思っていた調査区は、溝状遺構を境に北から東北方向の間が下の県道に向かって急傾斜していたことも判明した。なお、掘立柱建物跡は、調査区南側の平坦な面に、ほぼ同じ方位の軸で検出された。

調査終了を目前に控えた12月21日、野尻町立野尻小学校の4、5、6年生児童120名と引率教諭6名の計126名が来訪する。午前と午後に分かれて、調査区（B区）と地表面観察で城郭遺構を体感できる本城の跡を見学する。野尻城の新城と比べて、その存在すらあまり知られていない自分たちの身近な所に眠っている遺跡に触れる機会を設けていただいたことは、調査をする側としてもありがたいことであった。

第2節 基本層序

本城原遺跡の基本層序を第3図に示した。

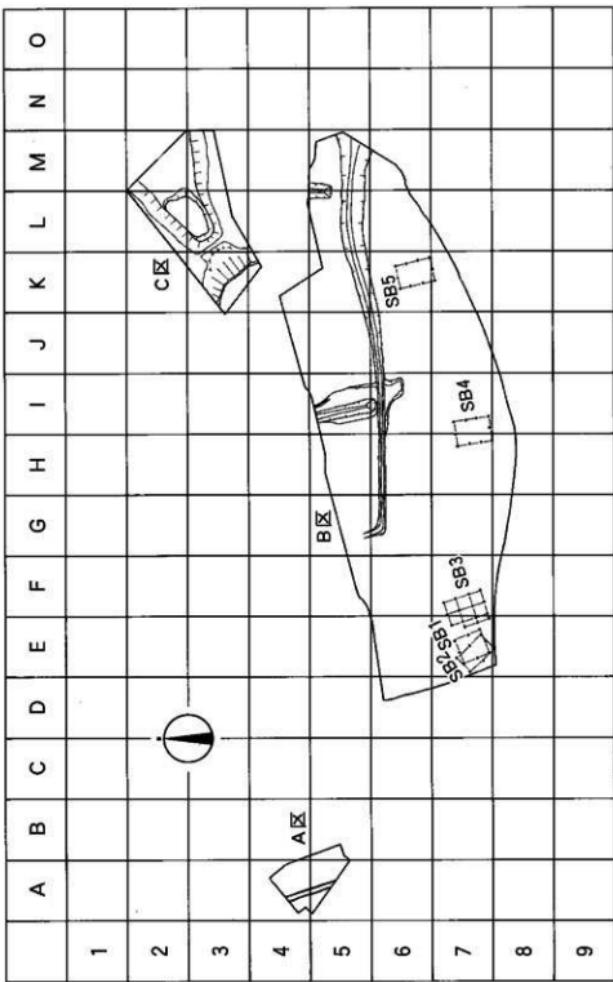
第I層（表土・耕作土）は、根菜類および飼料栽培の畑として利用されていたため、80cm前後の深さまで耕作による影響を受けている。また第II層では、第IIa層で第VII層の小林軽石の粒子が、第IIb層では戸入火砕流堆積物（シラス）に起因すると思われる黄白色軽石の粒子が確認でき、耕地を造成した際の客土の可能性が高い。したがって、層位的には、第III層以下をプライマリーな堆積と考えた方が良さそうである。

第III層は、アカホヤ火山灰層の前位層であり、A区ではこの上面で遺構が検出された。硬くしまっており、ガラス成分がわずかに確認できた。第IV層は鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層である。調査区内では二次堆積と思われる堆積状況の場所もあったが、第V層との層界付近に火山豆石が確認されたことから一次堆積と考えられる。第V層は「カシワバン」の通称で呼ばれている牛の脛ローム層である。暗い灰緑色を呈し非常に硬くしまっている。第VI層は黒褐色土層で、混在する粒子を手掛かりにさらにVIA、VIB、VICの3つに分層した。縄文時代早期の遺構・遺物の存在が予想されたが、トレンチを設定してによる確認した結果以降・遺物とも確認できず無遺物層と判断した。第VII層は小林軽石層である。およそ20cm前後の平均した厚みで堆積していた。第VIII層は黄褐色土層である。小林軽石の粒子が上層に混在している。第IX層以降は褐色の粘質層である。径が10mm前後のバミスを3%程度含んでいる。

I	第I層 表土・耕作土	
IIa	黒色土	2mm前後の黄白色軽石の微粒子を含む。
IIb	黒色土	赤褐色のスコリア（1~2mm）を5%程度含む。
III	第III層 褐色土	
IV	アカホヤ火山灰層	火山豆石が確認でき、良好な状態で堆積している。
V	牛の脛ローム層	非常に硬くしまっている。
VIA	黒褐色土	硬くしまっており、ガラス成分をわずかに含む。
VIB	黒褐色土	2mm前後の黄白色軽石の粒子を含む。
VIC	黒褐色土	小林軽石がわずかに混在する。
VII	小林軽石層	良好な状態で堆積している。
VIII	黄褐色土	小林軽石が上面にわずかに混在する。
IX	褐色土	粘性があり、10mm前後の明褐色のバミスを含む。

第3図 基本層序模式図

第4図 グリッド配置図 (10mグリッド, 1/800)

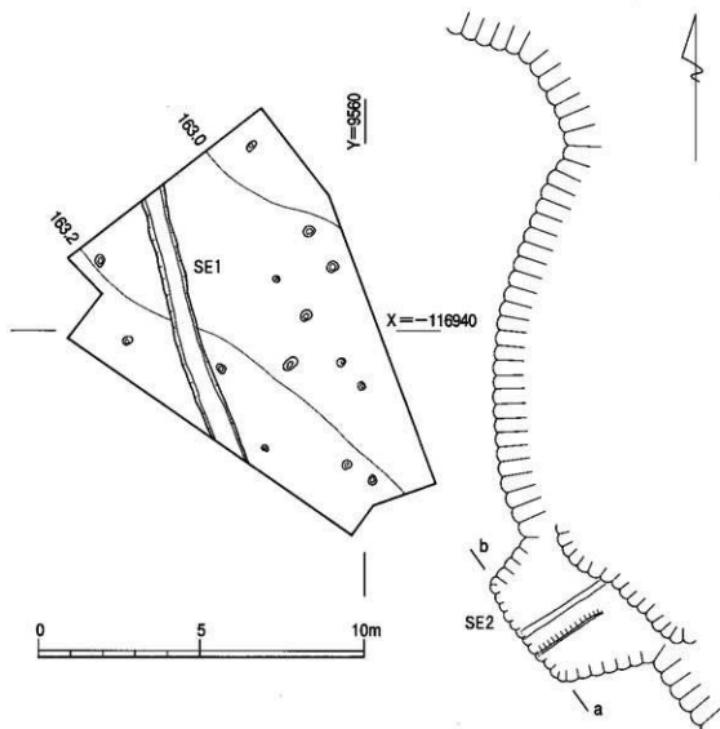


第Ⅲ章 調査の記録

第1節 A区の調査

調査区の中で、最も西に位置する。県道側法面の崩落が進んでいたため、安全が確保される範囲で調査を行った。その結果、溝状遺構1条とピットを検出したが遺物は出土しなかった。また、南東側の崩落面で調査以前に確認されていたV字溝（2号溝状遺構）についても並行して調査を行った。

なお、2号溝状遺構については、A区に隣接することからこの節で取り扱うことにする。



第5図 A区遺構分布図 (1/150)

1 遺構

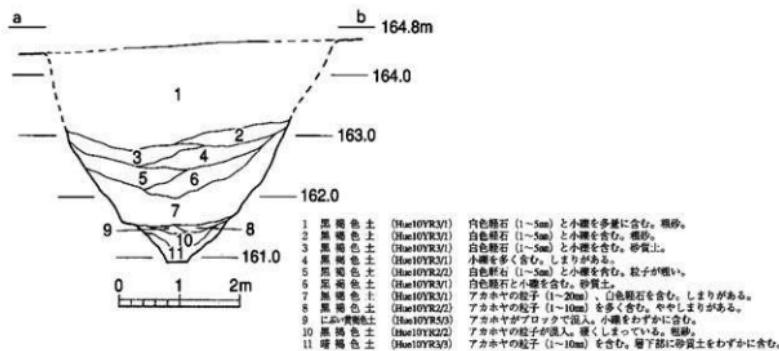
(1) 溝状遺構 (第5図)

・ 1号溝状遺構 (S E 1)

A4、A5グリッドで検出された(第5図)。検出範囲が制限され総延長は確認できない。遺構は幅約70~80cmで、南北方向に延びる。断面形は底面が広いU字状を呈し、検出面からの深さは約5~15cmである。遺構に伴う遺物が出土していないため、時期・性格ともに不明である。

・ 2号溝状遺構 (S E 2)

A区とB区を隔てる町道が県道42号と合流する付近、B5グリッドに位置する。法面の崩落進行を回避する必要性と遺構が調査区外へと延長するため全容解明には至らなかった。断面形はV字状を呈し、底から約60cmの所に小段が認められる。また、底部には約30cmの幅で硬化面が形成されている。確認できた範囲では深さ約3.6m、幅約3.5mを測るが、第6図に示す土層断面図の第1層、第2層が基本層序における第IIa、b層(造成土)の混濁層に相当することから断面で残存を確認できた遺構の深さはおよそ2m前後である。



第6図 2号溝状遺構土層断面図 (1/80)

2 遺物

遺構に伴う遺物を第7図に図示した。

1は染付の皿である。小段の平坦部付近から出土した。口縁の内側と外側に1条の界線がめぐり、口縁部が外反する端反皿である。16世紀後半に位置づけられる。



第7図 2号溝状遺構出土遺物実測図 (1/2)

第2節 B区の調査

調査区の中で最大の面積を有する。溝状遺構、掘立柱建物跡、土壤等が検出された。遺構に伴う遺物は、貿易陶磁がその大半を占める。

1 遺構

(1) 溝状遺構 (第10図)

・3号溝状遺構 (S E 3)

B区の標高160～161m付近を東西方向に横断するような形で検出された。総延長は約75mを測り、谷へと開口する東端が最深部になる。また、西端部ではL字形に屈曲し、区画溝状の様相を見せる。最深部では深さが約3m、幅は上端で2.8mに達し、底部に幅が50cm前後の平坦な硬化面を形成している。断面形は、東端部では底部に平坦面をもつ箱型の形態であるが、西端部に近づくにつれて足の短い逆台形を呈し、G5グリッド付近で消滅する。この遺構には、I6グリッド付近で一旦浅くなり登り口と推測される道状の遺構が取り付く。これは、掘立柱建物跡が検出された傾斜が緩やかな南側の平坦面へと連絡するための機能をもつと推測される。

遺構に伴い遺物した遺物を第8図に示した。

2は染付碗の口縁部である。内面に1条の界線

がめぐり、外面には帯文を施す。

・4号溝状遺構 (S E 4)

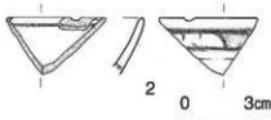
B区のI6グリッド北端からI5グリッドにかけて、ほぼ磁北に沿う形で検出された。遺構は北端部では調査区外に延長するため、全体像を把握することはできない。

確認できた範囲では、最深部で深さ約1.2m、幅は上端南端の最大幅部で約2.5m、底部には北に向かって狭くなる幅約0.4～1.2mの平坦な硬化面を形成している。断面形は、東端部では底部に平坦面をもつ箱型の形態であるが、西端部に近づくにつれて浅くなり、G5グリッド付近で消滅する。側面の整形が丁寧に施されているとともに、隅角を直線的に造り出していることが特徴的である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

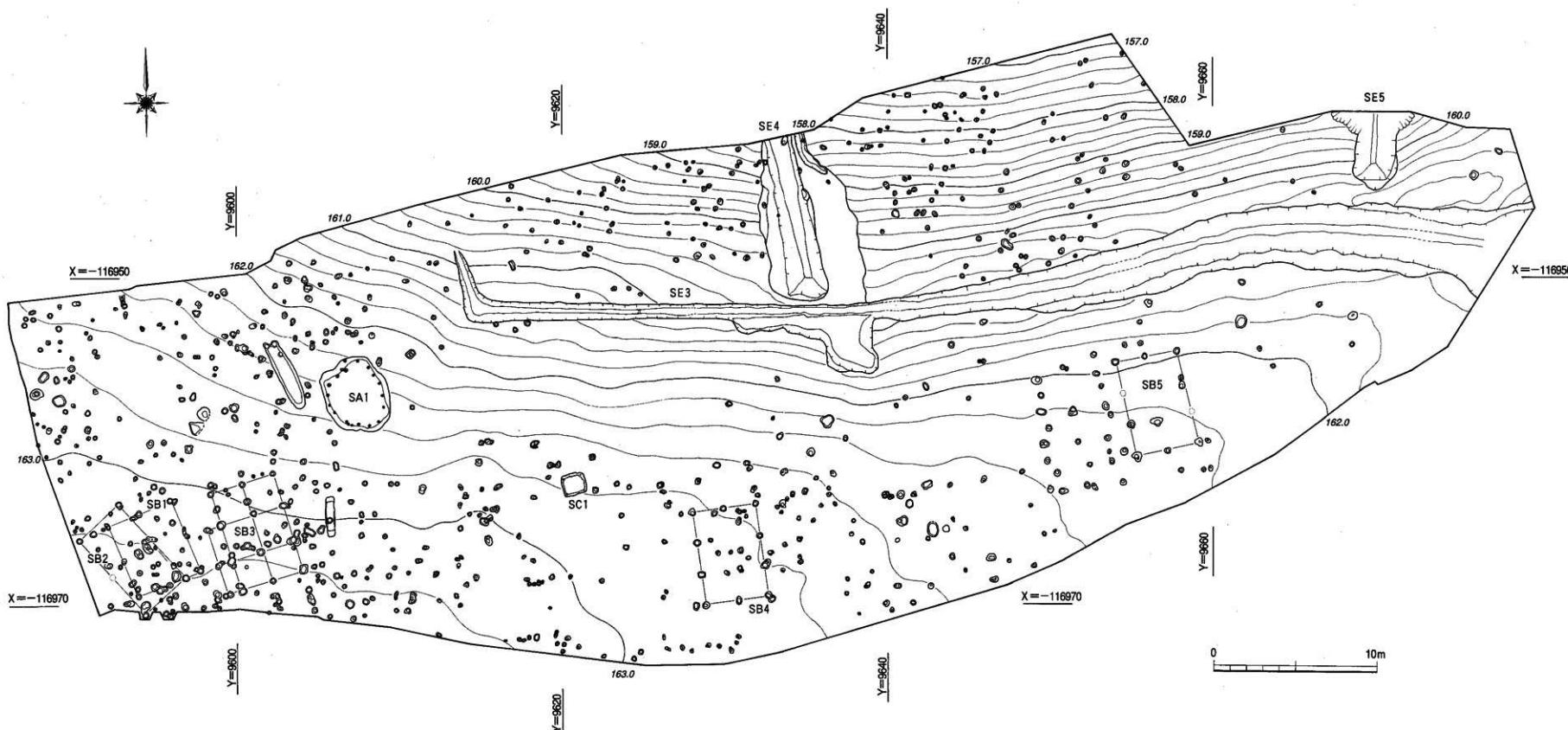
・5号溝状遺構 (S E 5)

B区の3号溝状遺構の東端近く、L5・L6グリッドにまたがって検出された。3号溝状遺構に対してほぼ直角となる位置関係で配置されている。重機によると思われる作業道開削のために調査以前に消滅した部分もあり、残存した範囲しか検出することができなかった。4号溝状遺構と比較するとやや深めで幅も狭いが、形状が近似しており同時期の造作かと思われる。

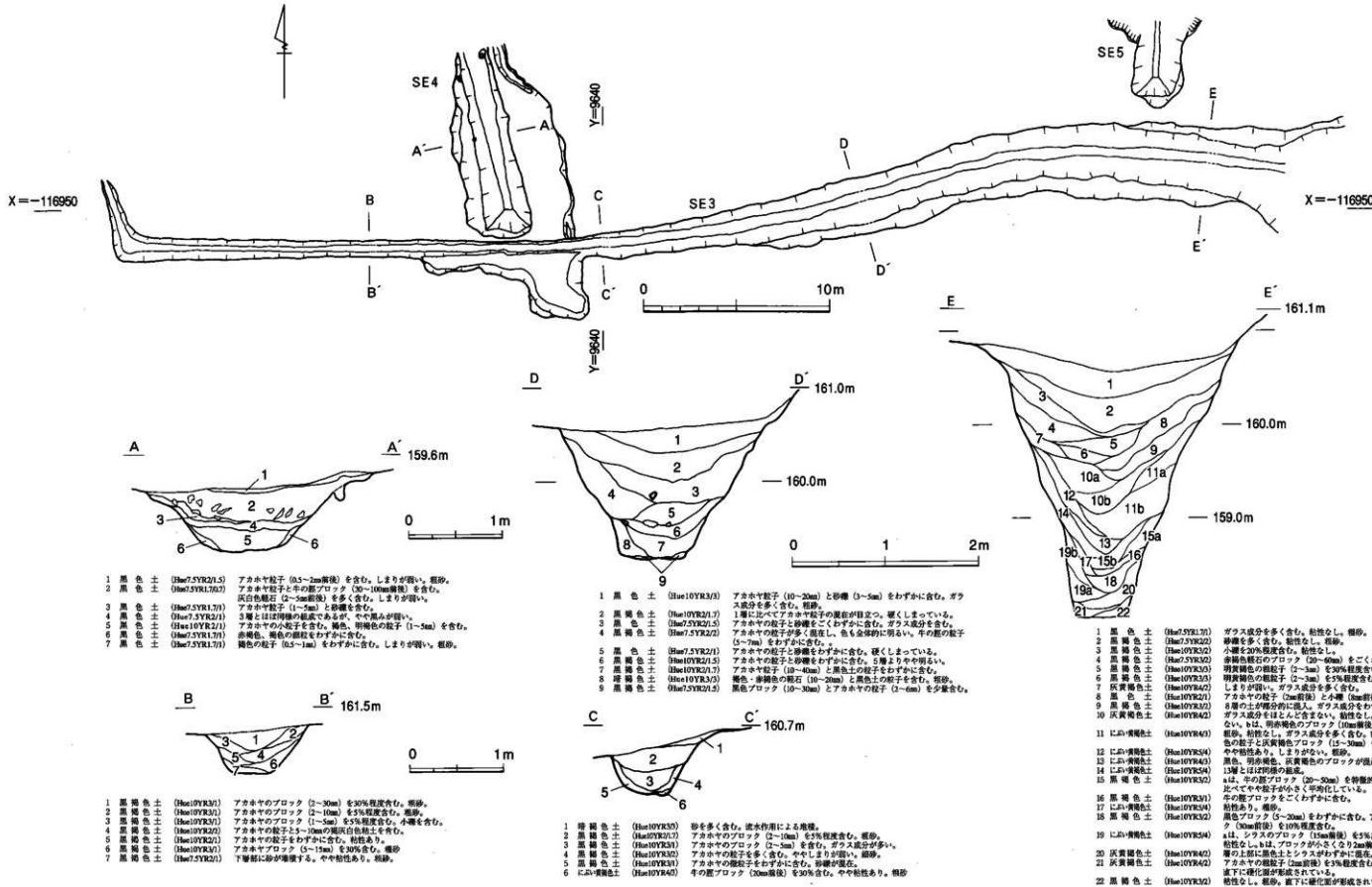
検出面の上端はほぼ均一で約2.3m、深さは最深部となる南端部で1.8mである。4号溝状遺構との相違点としては、底部に幅30cm前後の平坦面があるが、硬化面は形成されていないことと、4号溝状遺構とは連絡せずに単独で存在することの2点があげられる。この点で、4号溝状遺構とは性格を異にする遺構であると推測できる。遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第8図 3号溝状遺構出土遺物実測図 (1/2)



第9図 B区構造分布図 (1/200)



第10図 溝状造構実測図 (SE3, SEA, SE5) (1/200) よび土層断面図 (1/40)

(2) 堀立柱建物跡（第11図～第13図）

堀立柱建物跡はすべてB区で検出され、全部で5棟を確認した。検出された遺構は、1号堀立柱建物跡が2間×2間、2号堀立柱建物跡が1間×2間、残りはすべて2間×3間で、柱の間隔は平均約2mである。検出された柱穴は、大変硬くしまっている牛の脛ローム層を基底としており、根固めの石等が伴わないのはそのためであると考えられる。

・1号堀立柱建物跡（SB1、第11図）

B区で検出された2間×2間の堀立柱建物跡である。方形に近いプランを呈する。

・2号堀立柱建物跡（SB2、第11図）

1号堀立柱建物跡と切り合形で検出された1間×2間の堀立柱建物跡である。主軸が残り4つよりも大きく西に振れる。

・3号堀立柱建物跡（SB3、第12図）

B区のほぼ中央で検出された2間×3間の堀立柱建物跡である。西側に庇と考えられる3つの柱穴が取り付く。

・4号堀立柱建物跡（SB4、第13図）

B区のほぼ中央南側で検出された2間×3間の堀立柱建物跡である。柱間が正確に設置されている。

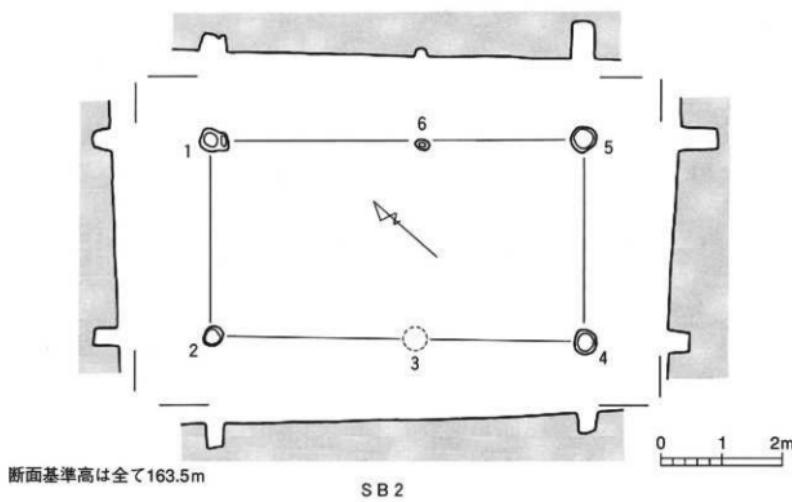
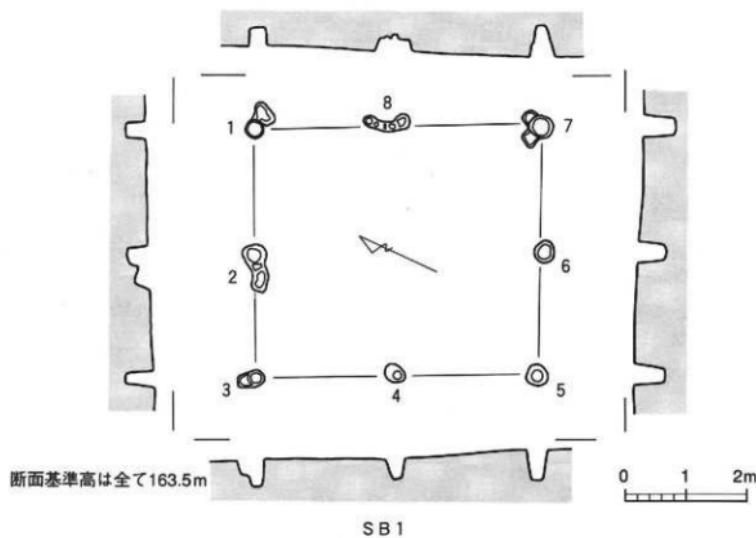
・5号堀立柱建物跡（SB5、第13図）

B区の東端で検出された2間×3間の堀立柱建物跡である。木根が進入した影響で2つの柱穴が不明瞭になっており、柱穴の旧状を確認できなかった。

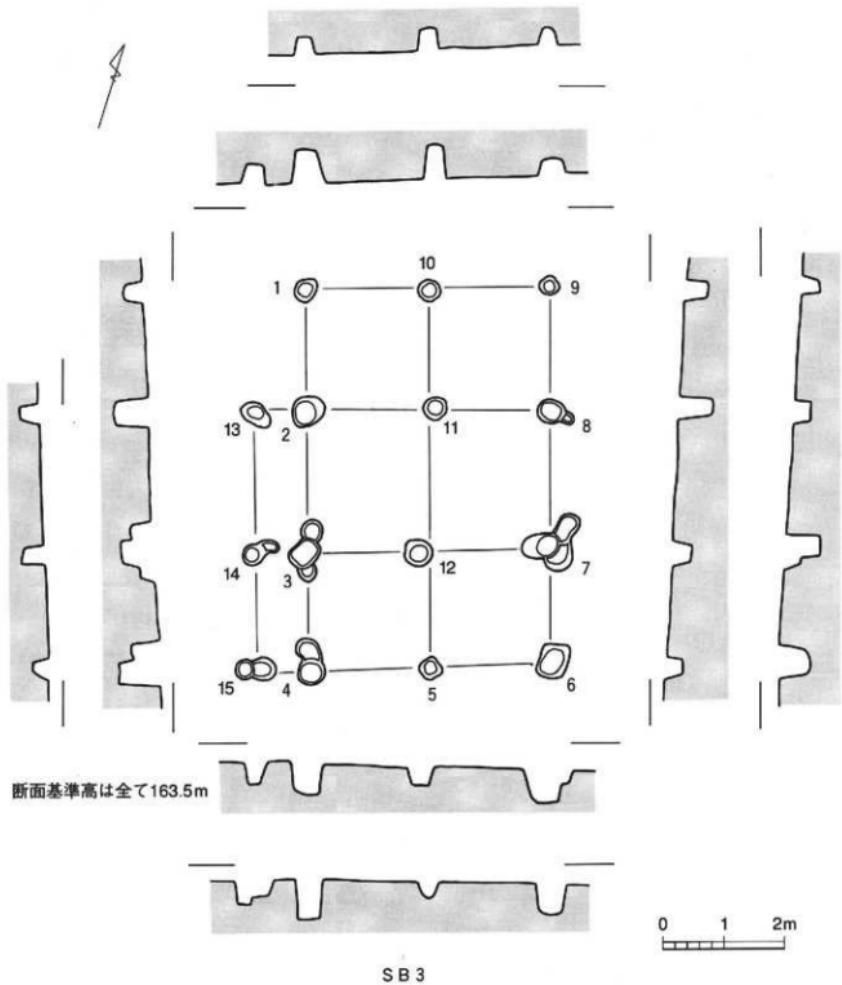
主軸の方位から考えると、SB3とSB5はほぼ同軸にのっていることから同時期の作事によるものかと思われる。また、この軸方位は調査区中央を東西方向に横断する3号溝状遺構に垂直でもあり同遺構を意識した配置と見てとれる。SB4についてもやや主軸にずれはあるものの、同時期の遺構の可能性が残る。SB1とSB2については、主軸の方位のみを考えると、それぞれ若干の時期差があるものと考えられる。

遺構番号	主軸方位 (G. N)	規 模	桁 行 (m)	梁 行 (m)	桁梁比率 (桁/梁)	面 積 (m ²)	検出位置 (グリッド)
SB 1	N-25°-W	2間×2間	4.8	4.1	1.17	19.68	E 7
SB 2	N-41°-W	1間×2間	6.2	3.3	1.88	20.46	E 7, E 8
SB 3	N-14°-W	2間×3間	6.3	4.0	1.58	25.20	E 7, E 8
SB 4	N- 9°-W	2間×3間	5.8	3.9	1.49	22.62	H 7, I 8
SB 5	N-13°-W	2間×3間	6.2	3.8	1.63	23.56	K 6, K 7

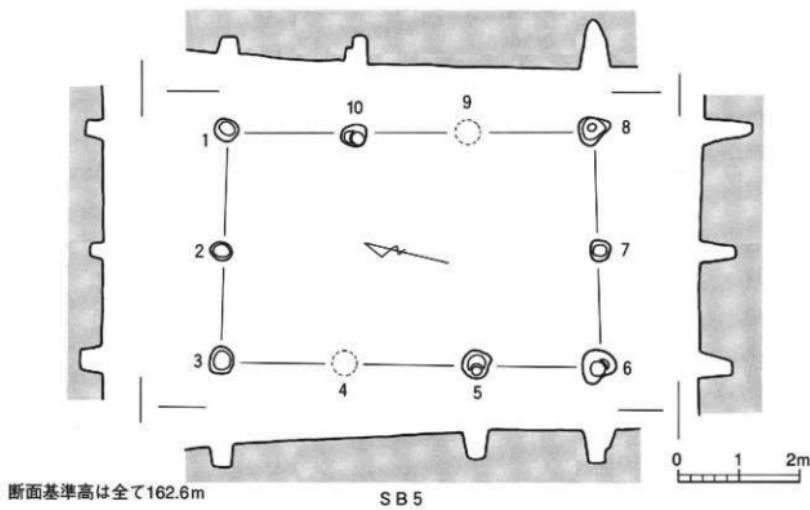
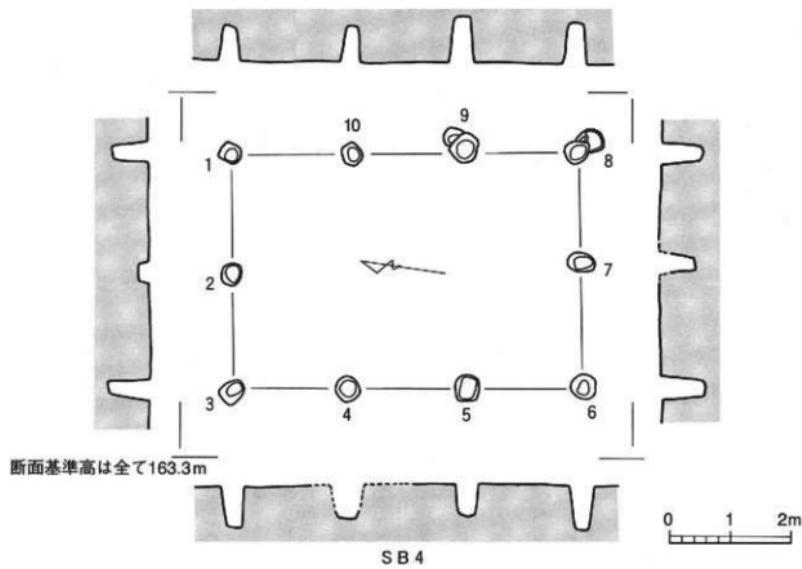
第1表 堀立柱建物跡一覧表



第11図 捜立柱建物跡実測図 (1) (1 / 80)



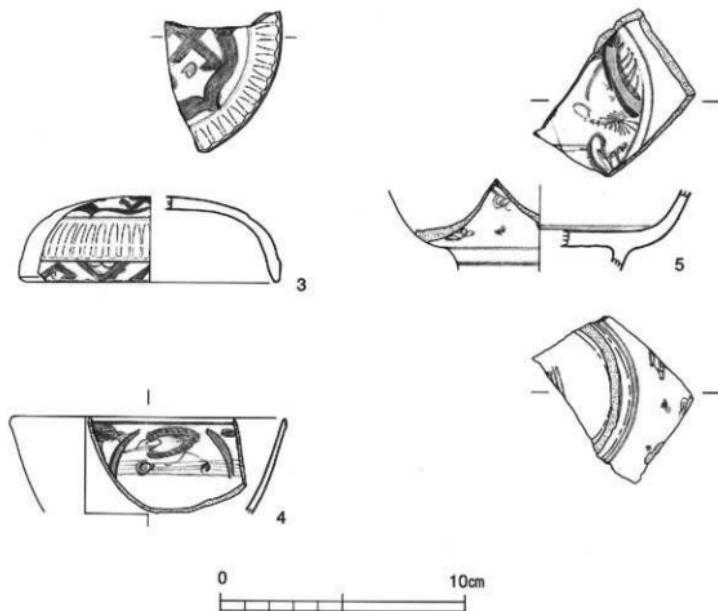
第12図 挖立柱建物跡実測図 (2) (1 / 80)



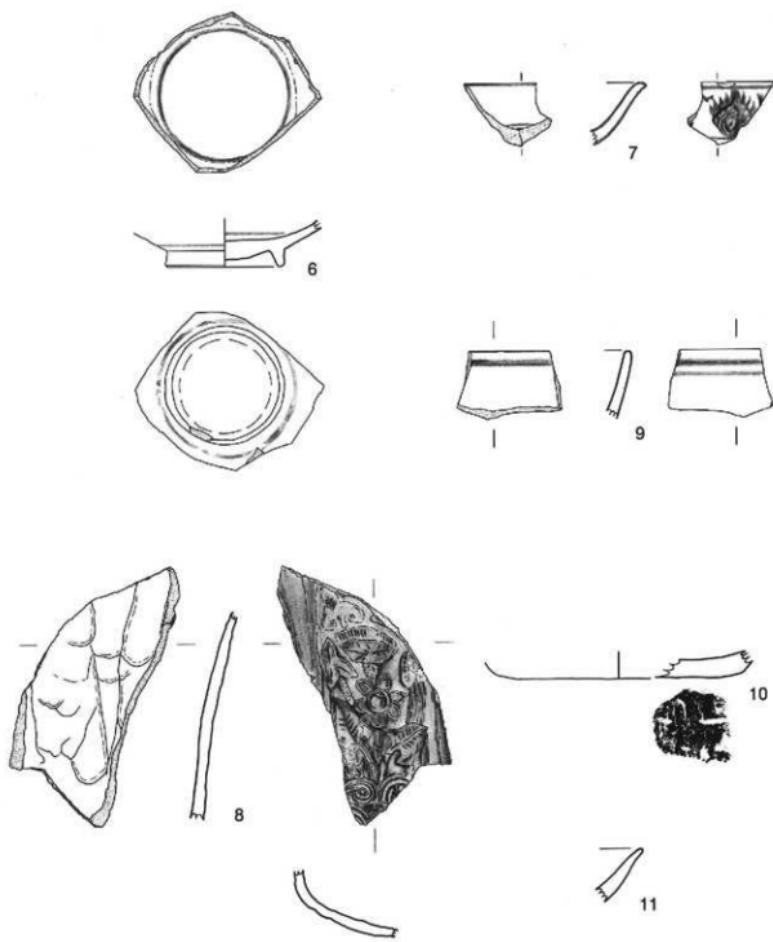
第13図 挖立柱建物跡実測図 (3) (1 / 80)

掘立柱建物跡の柱穴から出土した遺物を第14～15図に示した。なお、遺物が出土した柱穴を示す略号として「SBO-P△」を用いた。これは、「○号掘立柱建物跡の△番ピット（柱穴）」を意味する。

3から5はSB1-P7から出土した遺物である。3は染付の合子の蓋である。内外面ともに施釉されるが、内面の口縁部に釉剥ぎが見られる。「壽」の文字が意匠としてあしらわれている。呉須の発色があまり良くない。4、5は染付の碗である。4は薄手で、口縁部の内面に蓮池水禽文が帶文状に描かれ、口唇部に釉溜が見られる。外面には施文が見られない。5は2本の圓線で囲まれた見込み部分に草花文、外面には飛雲文が描かれる。高台内部には、二重方形枠の落款の一部が確認できる。6はSB3-P3から出土した白磁の皿である。鉄釉の圓線が見込みと高台付近に見られる。7はSB4-P4から出土した染付の皿である。内面に界線と圓線が確認できる。外面には宝相花唐草文と1条の界線が施される。8は華南系の綠釉陶器である。SB4-P5から出土した。押型成形による型作りで、花器の胴部あるいは頸部の一部と考えられる。青海波と慈姑（くわい）が表現されている。福建省漳州窯の16世紀代に同様の色調と文様をもつものがある。9はSB5-P3から出土した染付の碗である。口縁部外面に2条、内面に1条の界線がめぐる。10、11は土師質土器である。10は皿の底部で、回転糸切りの痕跡が確認できる。11は壺である。外面全体に煤が付着している。



第14図 掘立柱建物跡出土遺物実測図（1）



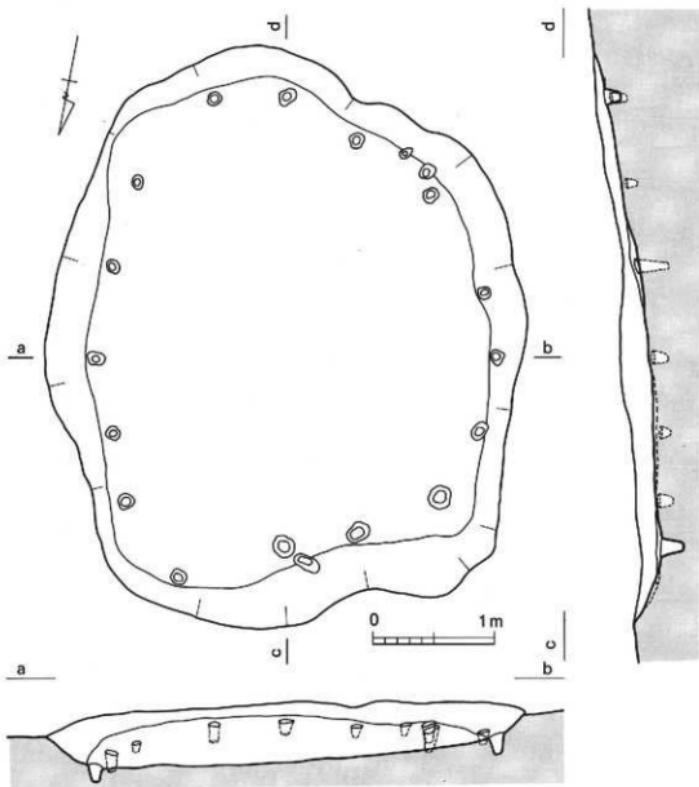
第15図 挖立柱建物跡出土遺物実測図 (2)

(3) 売穴建物跡（第16図）

・1号賣穴建物跡（SA1）

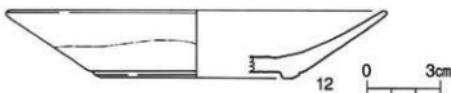
F 6 グリッドで検出された。不整形な円形プランをもつ賣穴建物跡で、緩やかな傾斜をもつ斜面に掘り込まれている。遺構は検出面の上端で長軸約4.8m、短軸約4.0m、中央付近で検出面からの深さ約20cmを計る。床面の整地は認められない。下端に沿ってほぼ等間隔で巡る、径10cm前後の小ビットが19穴検出された。「小屋」的な性格をもつ遺構と考えられる。

遺構に伴い出土した遺物を第17図に示した。12は白磁の皿である。見込み部分に釉剥ぎが見られ、中央部分に若干の高まりが確認できる。高台の外縁、疊付は研磨による丁寧な整形が施される。



断面基準高は全て162.8m

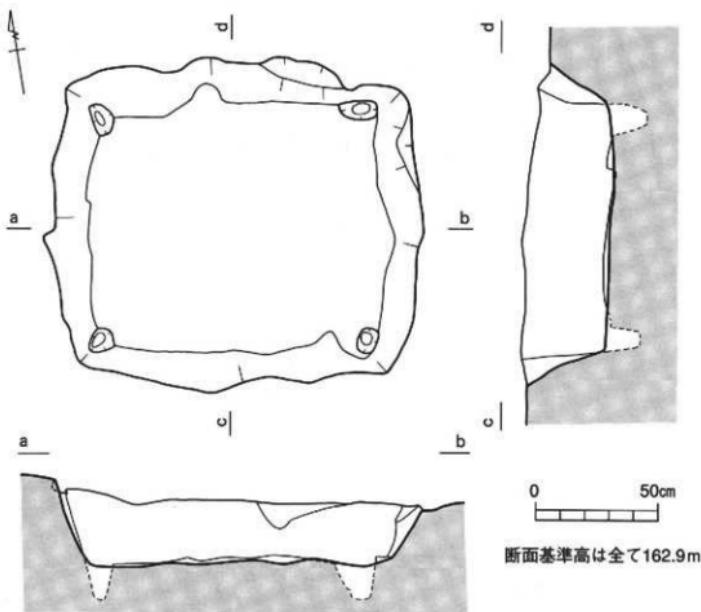
第16図 1号賣穴建物跡実測図（1／40）



第17図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図（1／2）

(4) 土 壤 (第18図)

J 7グリッドで検出された遺構である。検出面での上端は長軸約1.5m、短軸約1.3m、下端で長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さは最深部で約35cmを計る。長軸と短軸の比率（長軸／短軸）は1.15で方形に近い長方形のプランを呈する。また、床面の四隅に15cm前後の掘り込みが確認された。遺物等の出土もなく遺構の性格は不明であるが、隅角の掘り込みから覆屋状の構造物の存在が推測される。



第18図 1号土壤実測図（1／20）

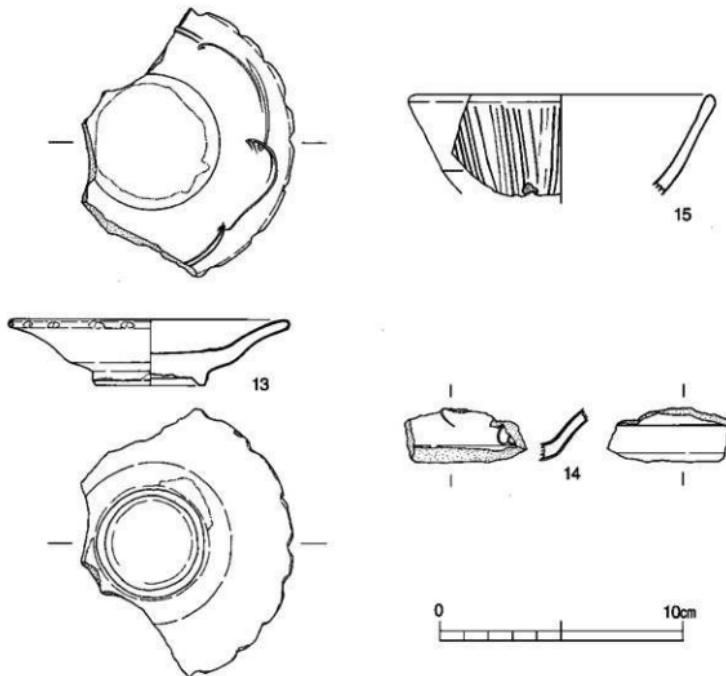
2 その他の遺物

遺構に伴わない遺物を第19~21図に示した。

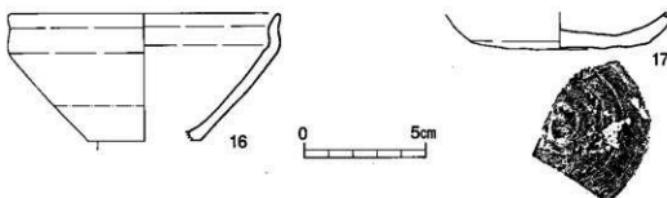
(1) 陶器・土師皿類

13、14は青磁の輪花皿である。13は見込みの部分と高台付近に釉剥ぎが見られる。高台内部の調整が粗い。口縁部の内面付近に線刻が施されている。14は13と比較して成形がしっかりしており、釉調に深みがあり施釉も丁寧である。内外面に範描きによる線刻が施される。15、16世紀に位置づけられる。

15は、青磁の碗である。外面に7条を1単位とする柳描文が施される。腹部下位の腰付近に折れが認められる。16は瀬戸・美濃の天目茶碗である。器表は、油滴風の色彩を帶び、露胎には銹釉の化粧がけが施される。大窯のII-b期に比定される。17は土師質土器である。坏で、底部は範切りの後にナデによる調整が見られる。



第19図 B区出土遺物実測図 (1) (1/2)

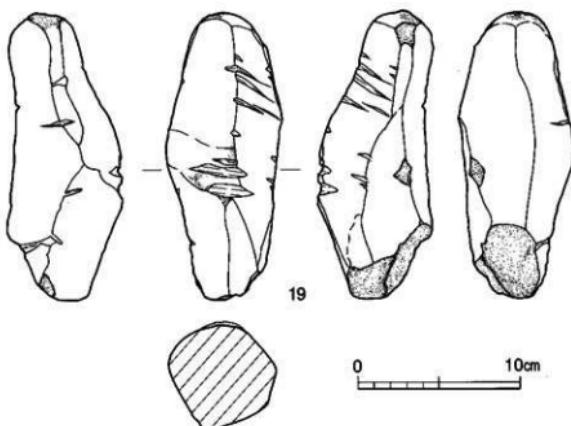
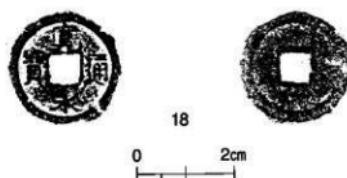


第20図 B区出土遺物実測図 (2) (1／2)

(2) 銭貨、石製品

18は寛永通寶である。重さ2.2g、残存最大径2.1cmである。裏には施文がない。

19は砥石である。ほぼ全面を使用している。重さ約820g、長軸17.70cm、短軸5.6cm、最大肥厚6.52cmである。稜部に擦り切りによる使用痕、端部には打痕が認められる。



第21図 B区出土遺物実測図 (3) (18は1／1, 19は1／3)

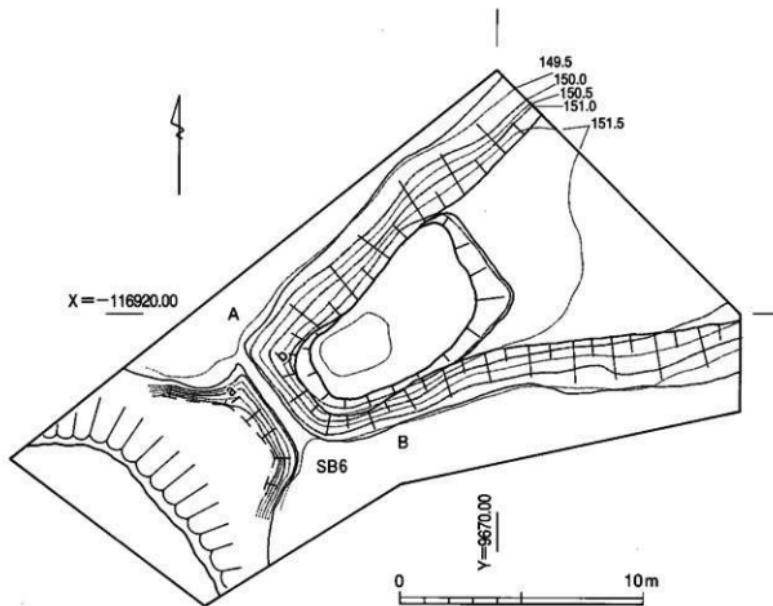
第3節 C区の調査

重機による作業道の伐開で旧地形がかなり失われていたが、調査の結果溝状遺構と地山整形による土壘状の遺構が確認された。

1 遺構

(1) 土壘状遺構

6号溝状遺構によって断ち切られた丘陵尾根の北東部を地山整形して造り出されたものである。最高点(152.64m)と6号溝状遺構の通路として利用されていたと思われる硬化面との比高差は、約2.9mある。遺構上部に不整形なマウンド状の高まりがあり、構造物の存在が予想されたが検出には至らなかつた。遺構の南壁から溝状遺構の壁面までは、ほぼ直立するかなり急な傾斜で削り出されているのに対し、北壁は比較するとやや緩やかな傾斜になる。これは、この遺構に隣接する本城の遺構から見て、内となる空間Aと外となる空間Bの間に性格的な相違に起因するものであると推測できる。

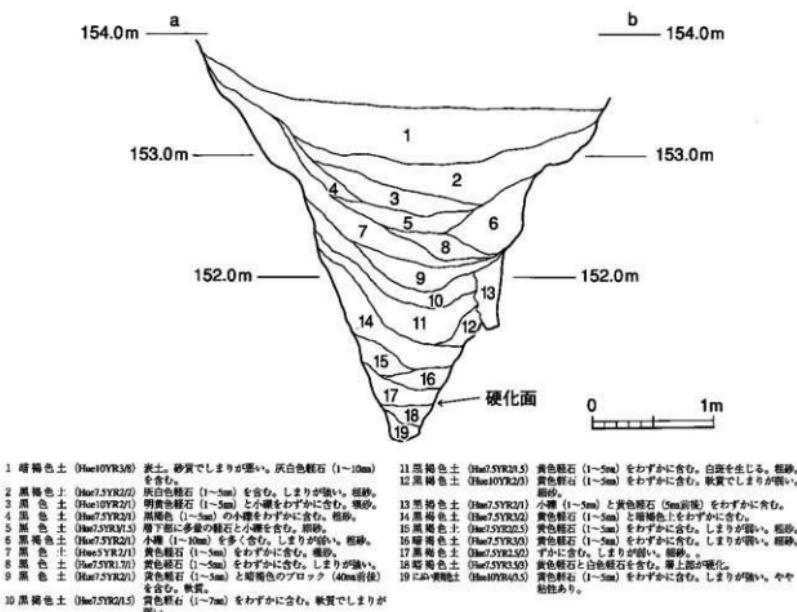


第22図 C区遺構分布図 (1 / 200)

(1) 溝状遺構

・6号溝状遺構 (S E 6, 第22図)

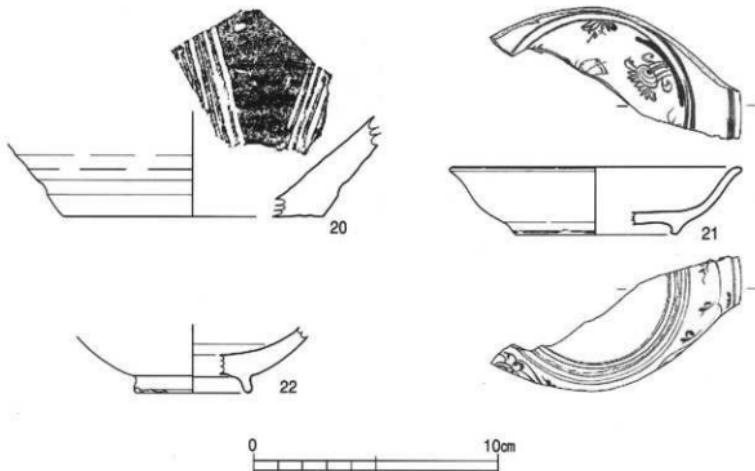
L3グリッドで検出された遺構で、同時に検出された地山整形による土壘状遺構の端部に位置する。遺構は、検出面からの深さが最深部で約2.4m、幅は上端で約3.3mある。断面はV字状の薬研堀の形態を呈し、17層と18層の境に約50cmの幅で硬化面が形成されている。その直上からは擂鉢片が出土した。しかし、土壘断面の観察では硬化面の下にさらに約30cmほどの掘込みが確認されたことから、第23図に示す第18層と第19層は底部整形に起因するものと考えられる。また、この遺構はB区の丘陵尾根を断ち切り壁面を整形していることから、通路として機能していたと推測される。



第23図 6号溝状遺構土層断面図 (1/40)

6号溝状遺構から出土した遺物を第24図に示した。

20は僧前の擂鉢である。通路として機能していたと思われる約50cm幅で延びる硬化面上から出土した。条線は8本をもって一つの単位として施されている。21は染付の皿である。見込みには花文、外面には牡丹唐草文が描かれる。高台内まで施釉され、裏付は釉剥ぎとなる。高台外側が面取りされている。16世紀後半に位置づけられる。22は肥前の碗である。外面のみ青磁であり、見込みは蛇の目釉剥ぎで白砂が融着している。埋土中の上層から出土した。18世紀後半に位置づけられる。



第24図 6号溝状造構出土遺物実測図 (1/2)

遺物番号	被羽	器種・部位	出土点	法身(cm) 口径 底径 高さ	開蓋・文様等		色調		粘土の特徴	備考
					外 面	内 面	内 面	外 面		
1	束付	口縁	A区 SE 2		施釉	施釉	灰白	灰白	粗糲	西瓦
2	束付	口縁	B区 SE 3		施釉 菊文	施釉 罩締	明オリーブ灰	明オリーブ灰	粗糲	
3	束付	合子蓋	B区 SE 1	10.4	施釉	施釉 施剥ぎ	灰白	灰白	粗糲	「壽」の文字
4	束付	口縁～体部	B区 SE 1	11.2	施釉	帶文(邊池水禽文)施釉	青みがかった白	青みがかった白	粗糲	魚形網
5	束付	口縁～底部	B区 SE 1		施釉	飛崁文	施釉	灰白	粗糲	
6	胸器	口縁～底部	B区 SE 4		施釉 貫入 回締	施釉 貫入 落胎 罩締	灰白	灰白	粗糲	
7	束付	口縁～体部	B区 SE 4		施釉 帶締	施釉 帯締 菊文草花文	灰白	灰白	粗糲	
8	胸器	不明	B区 SE 4		施釉 (縫結)	萬葉文	施釉 滑おきえのあとナデ	綠	淡黄	精良
9	束付	口縫	B区 SE 5		施釉 帶締	施釉 帶締	灰白	灰白	粗糲	
10	土師器	具底部	B区 SE 5	6.4	ナデ	ナデ 切り	灰ナデ	灰白	きの細かな鉢底	
11	土師器	环口縫	B区 SE 5	8.4	ナデ	全体的に張付着	灰ナデ	にぶい黄橙	茶色の網状を少部分含む	
12	胸器	口縫～底部	B区 SE 1	15.0 7.6 2.9	施釉 貫入 落胎	施釉 貫入 落胎 罩締	灰白	灰白	粗糲	
13	青磁	口縫～底部	B区	11.2 4.5 2.7	施釉 貫入 落胎	施釉 貫入 施剥ぎ 施釉	明オリーブ	灰白	輪花頭	
14	青磁	口縫	B区		施釉 貫入 窓網	施釉 貫入 窓網	灰オリーブ	灰オリーブ	粗糲	輪花頭
15	青磁	口縫～体部	B区	12.1	施釉 飛崁文	施釉	灰白	灰白	粗糲	
16	胸器	口縫～体部	B区	11.0	施釉 施釉化粧 直物	施釉	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗糲	天目茶碗
17	土師器	环口縫～底部	B区	7.4	ナデ ヘラ切りのあとナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	粗糲	
20	胸器	口縫～底部	C区 SE 6	10.8	ナデ	模子のあとと彫刻工具による 丁方の沈線	にぶい赤褐色	2cm以下の浅黄色 或は白色及、赤褐色を含む	粗糲	
21	束付	口縫～体部	C区 SE 6		施釉 帶締 罩締	施釉 帯締 罩締 菊文花	明オリーブ灰	明オリーブ灰	粗糲	
22	胸器	口縫～底部	C区 SE 6	4.7	施釉	施釉	明オリーブ灰	灰白	精良	肥前系

第2図 出土遺物観察表

第IV章 まとめ

今回の発掘調査で明らかになった遺構・遺物は、調査区北側に隣接する「本城」との関連も含めて検討を加えることで、中世のこの地の姿を明らかにする手がかりになると考えられる。そこで発掘調査と縄張り調査の成果等を踏まえて、本遺跡の性格について考えることをもってまとめとしたい。

遺構

今回検出された遺構の中で、1～6号までの溝状遺構の存在は興味深いものがある。A区で検出された1号溝状遺構についてはその性格について論じることはむずかしいが、2～6号についてはその配置等から隣接する野尻城本城の中世城郭遺構との関連を考える必要がある。特にB区を東西に横断する3号溝状遺構(SE3)とそれに対して直角方向に配置された4号、5号溝状遺構(SE4、SE5)の間には、堀底道としての性格も兼ね備えた主たる空堀(SE3)と斜面に掘り込まれた堅堀状の性格をもつ防御施設(SE4、SE5)という関係が見てとれる。また、同時に検出された掘立柱建物跡(SB3、SB4、SB5)が、SE3と長軸を直交させるように配置されていることも興味深い。

その他、B区で検出された1号堅穴建物跡(SA1)は、プランがはっきりしないが、下端の線に沿って小ピットが巡る遺構で、小屋としての機能が想定できるものである。

遺物

遺物の出土点数は少なかったが、貿易陶磁を中心とした構成となっており遺跡の評価に際しては有効な手掛かりとなった。貿易陶磁はすべてが中国製であり、遺物点数の大半を占めている。染付、青磁とともに15、16世紀の遺物がほとんどで、小野正敏氏の分類によるところの染付皿B群に類する7、21のはかに、景德鎮窯の染付碗4などがあげられる。また、8の福建省漳州窯のものと思われる華南緑釉陶器は、押型成形によるものであるが器形の想定に至らず、今後検討の余地があり類例等を求める。

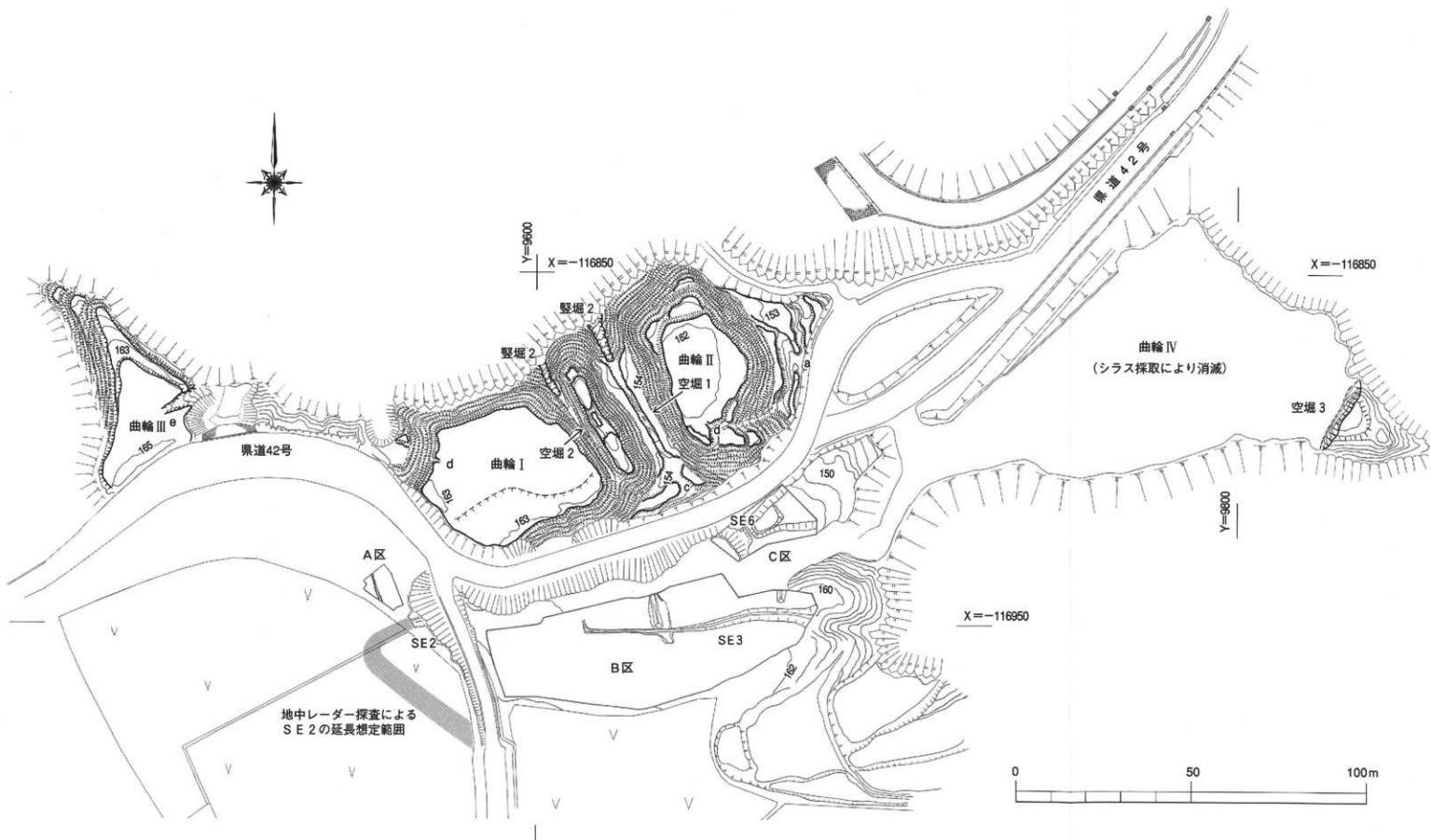
反面、陶磁器類が優勢を占めるのに対して、日常雑器としての土師皿類の出土数が極端に少ないのもこの遺跡の特徴である。その要因としては、耕作等によりアカホヤ上面まで影響を受けていたこと以外に、調査区が恒常に使われていた生活面ではなかったという視点も掲げておきたい。

縄張り図から見た「本城」

城郭遺構が現況で確認できる範囲は第25図のとおりである。シラスの削取により消失した曲輪Ⅳの東端に片方の壁面のみが遺存している空堀3から西端で確認できた曲輪Ⅲまで、台地の縁辺部にゆるやかに突出したシラス台地の急崖を巧みに城取りした城域が展開する。

明瞭に遺構が確認できる調査区北側は、大きく東西2つに区画される。面積的に優勢かつ空堀1・2で防護された曲輪Ⅰが主郭と思われるが、防御性・求心性の視点から観察すると曲輪Ⅱも重要な機能を果たしていたことがうかがえる。堅堀の配置や二重の空堀などの巧みな縄張りからして、本城と新城との関係は新旧という考え方でつなげるのではなく、新城との並行関係の時期を考慮に入れた縄張り研究を進めていくことが今後の課題となるであろう。

- (参考文献) 『南九州堅穴建物集成』 堂込秀人 南九州城郭談話会 創刊号 (1999)
『15、16世紀の貿易陶磁』 小野正敏 貿易陶磁研究 第2号 (1982)



第25図 野尻城（本城）網張り図ならびに周辺地形図（1／1,000）



A 区 全景



B 区 全景



C 区 全景



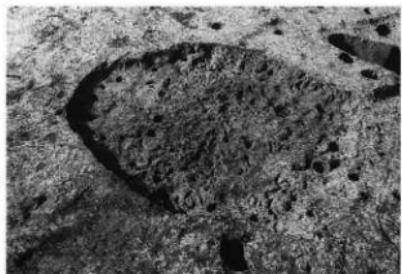
B 区 溝状遺構（垂直）



2 号 溝状遺構土層断面



3 号 溝状遺構土層断面

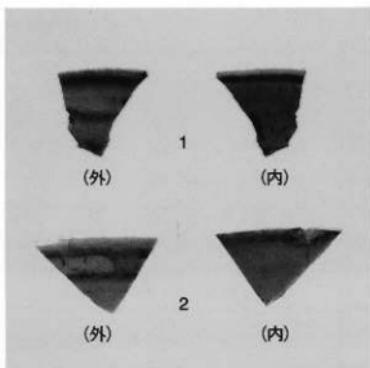


1 号 穴建物跡

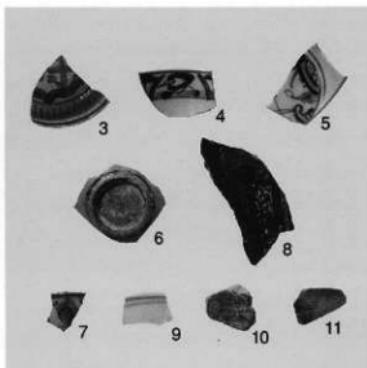


1 号 土 壤

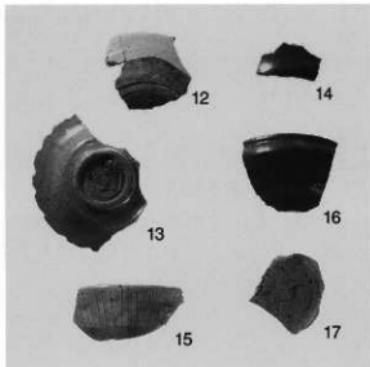
圖版 2



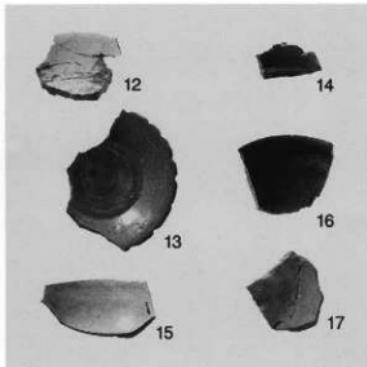
2号、3号溝状遺構出土遺物



B区掘立柱建物跡出土遺物



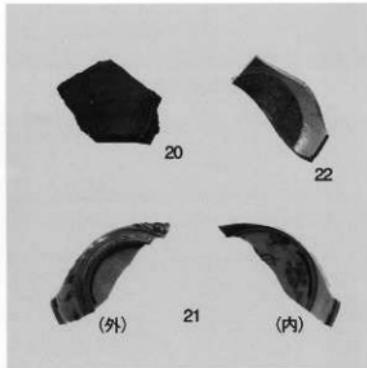
B区出土遺物(1) 外面



B区出土遺物(2) 内面



B区出土石製品



C区6号溝状遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほんじょうばるいせき はくつちょうさほうこく								
書名	本城原遺跡発掘調査報告								
副書名	主要地方道都城野尻線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
卷次									
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書								
シリーズ番号	第34集								
編集者名	福田泰典								
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター								
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171								
発行年月日	西暦2001年3月9日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °・'・"	東經 °・'・"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
ほんじょうばるいせき 本城原遺跡	みやざきけんにしもろかたぐん 宮崎県西諸県郡 のじからこう 野尻町	市町村	遺跡番号	45362	31度 56分 20秒 付近	131度 47分 50秒 付近	19990831 ～ 19991224	5,000	主要地方 道都城 野尻線 道路 改良工事 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
本城原遺跡	城館跡	中世	・掘立柱建物跡 5棟 ・竪穴建物跡 1棟 ・溝状遺構 6条 ・土壙 1基	貿易陶磁、肥前系陶 磁、備前焼鉢、砥石、 銭貨		谷筋から続く箱築窯の 堀を確認		明末清初の中国産陶磁 器が出土	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第34集

本城原遺跡

主要地方道都城野尻線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年3月9日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎都佐十郎町大字下野所4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 田中印刷有限会社
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地
TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285
